



平成 24 年 10 月 3 日  
内閣府（防災担当）

## 首都直下地震モデル検討会（第7回）議事概要について

### 1. 第7回検討会の概要

日時：平成 24 年 9 月 20 日（木）17:00～19:00

場所：中央合同庁舎5号館 防災 A 会議室

出席者：阿部座長、岩田、大原、岡村、佐竹、平田、福和、山崎の各検討会委員、原田政策統括官 他

### 2. 議事概要

首都直下地震モデル検討会で検討対象とする地震に関して、事務局から説明を聴取し、委員間で議論を行った。今回の議事の概要は次のとおり。

- 2004 年の首都直下地震の検討に用いた浅い地盤構造モデルと南海トラフの検討で用いたモデルとの増幅度の違いは、1km メッシュと 250m メッシュのなかで最も増幅度が高いデータを用いていることの影響が大きいという理解でよいか。また、2004 年の首都直下地震の検討の際に 50m メッシュで作成した浅い地盤構造モデルも南海トラフの検討で用いた 250m メッシュと同様の傾向を示しているのか。
- AVS30 のデータを見ると以前になかった特異点のような場所が見受けられる。
- 微地形区分を用いた地盤構造モデルの AVS30 の構築では、微地形区分を細かい区分で行うと、同じ分類の微地形がない場所が出てくる。そのことが影響を及ぼしていないのか。
- AVS30 のデータを構築する際に、深さ 30m までボーリングがない場合が多いが、どのようにデータを構築しているのか。
- 地形グループの AVS30 と微地形区分による AVS30 の関係で系統的にデータがずれているものがある。確認は行う必要があるのではないか。
- 立川断層帯の傾斜角が極めて高角と評価されているが逆断層で 80° の設定は無理がある。立川断層帯の周辺の断層の傾斜角を考えると 60° が良いのではないか。
- 小断層の断層サイズを 2km と 5km のように変えた場合には、2km メッシュに設定した方が一般的になめらかな破壊になり、見かけの周期より、結果に影響を及ぼすこともある。試算を行い適切なパラメータを設定する必要がある。
- 最終的な結果の比較では、浅い地盤構造の影響が入っている。工学的基盤で比較したものをつける必要がある。
- 震度値の比較では差の原因が見えにくいので、波形がどう違うかを見る必要がある。
- 統計的グリーン関数法を用いた計算手法、地盤の構造の違いもあり、計算結果の違いの原因

が見えないため評価が出来ない。それぞれ方法を変えた場合にどう変動するかを見ていく必要がある。

- 東京都の想定には立川断層もあるので、結果を比較してはどうか。
- 過去地震のマグニチュードを記載する場合は地震動から決めたものと津波の大きさから決めたものを併記する方が、その違いが分かってよい。
- 過去地震の各地点の津波高にそれぞれの信頼度を示してもらいたい。
- 関東地震の場合の頻度の高い津波をどう考えるのか検討する必要があるのではないか。
- 地震調査委員会の長期評価部会では関東地震は大正タイプと元禄タイプに分けて考えている。元禄タイプの繰り返し間隔は約2300年となっており、そうするとこれは明らかにレベル2の津波ではないか。

<本件問い合わせ先>

内閣府政策統括官（防災担当）付

調査・企画担当参事官 藤山 秀章

同企画官 若林 伸幸

同参事官補佐 下山 利浩

TEL : 03-3501-5693（直通） FAX : 03-3501-5199